



Title	近代中国語敬語体系の研究 : 日本語・英語との対照を視野に入れて
Author(s)	彭, 国躍
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3106796">https://doi.org/10.11501/3106796</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	彭 国 躍
博士の専攻分野の名称	博 士 ( 文 学 )
学 位 記 番 号	第 1 2 0 4 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 7 年 7 月 1 7 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 日本学専攻
学 位 論 文 名	近代中国語敬語体系の研究 －日本語・英語との対照を視野に入れて－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 真 田 信 治 (副査) 教 授 J.V.ネウストプニー 助教授 仁 田 義 雄

## 論 文 内 容 の 要 旨

日本語における敬語の体系的研究は、山田孝雄の研究以降、約70年間絶え間なく続けられ、その間、松下大三郎、湯沢幸吉郎、時枝誠記、辻村敏樹などのものをはじめとする数多くの敬語理論が展開された。半世紀ほど時代を先取りした日本の敬語研究は、一つの敬語理論モデルとして今日の世界の敬語研究に寄与するようになった。一方、1970年代後半からは、英語社会における敬語研究が本格的にスタートし、BrownとLevinsonによる〈メンツ〉に基づく丁寧さのストラテジーや、Leechによる丁寧さの原理などの理論が相次いで打ち出された。以来、世界の多くの言語に関する個別研究が続出し、敬語の普遍理論の模索も始まった。そして、対照研究や普遍理論の構築において、より多くの言語の敬語現象の記述が求められるようになった。このような敬語研究の流れの中で伝統的な中国語の敬語体系の記述研究の重要性も日増しに高まってきたのである。

本論文は、日本語及び英語の敬語研究の成果を踏まえ、それらとの対照を視野に入れて、近代（元、明、清代）中国語の敬語体系を、その「組織的メカニズム」、「対人関係の認知モデル」、そして「社会言語学的特徴」の面から記述したものである。

### 「組織的メカニズム」について

日本語の敬語は概念的意味を持たない特定の形態に基づくダイクシス型敬語であり、英語の敬語（politeness）は利害関係や間接性などに基づいて発話行為を調節するストラテジー型敬語である。これらの敬語タイプとの比較を通して、近代中国語の敬語は、英語のように発話行為レベルで規定されるものではなく、また日本語のようにダイクシスとして記号化されたものでもなく、文字通りの概念的意味を介して、丁寧さの含意を表出するという特徴を持ったものであることが分かった。筆者はこのような近代中国語の敬語を、ダイクシス型、ストラテジー型と並べて、メタファー型敬語として位置づける。このメタファー型敬語は、これまで個別現象として指摘されたことはあるが、その体系については一度も記述されたことがない。本論文ではこのメタファー型敬語に利用される諸概念間の構造的ネットワークとその体系像を明らかにした。さらに、中、日、英語において抽出された三つのタイプをモデルとして、世界の敬語現象に対する類型論的分析を行った。

### 「対人関係の認知モデル」について

言語は自然現象ではなく、人間の精神活動の所産である。それゆえ、言語研究は自然科学とは異なり、人間の精神活動の方向づけや支えとなっている文化的背景を無視することができない。本論文では、体系的なメタファー型敬語が成立する認識論的背景、その認知基盤を究明するために、認知意味論の観点を導入し、中国文化における世界の捉え方、心的世界像の構造に光を当て、伝統的な世界観、価値観、倫理観と関連づけながら、中国における世界の認知モデル及びそれに基づく敬語の人間関係の認知モデルを構築した。

### 「社会言語学的特徴」について

近代中国語敬語の運用的特徴を明らかにするために、社会言語学的なアプローチを導入し、近代口語小説を対象に、特定の発話がかかわった具体的な人間関係を詳細に調査することにより、身分、年齢、性別などの社会的属性が敬語運用にどのような影響を与えているかを明らかにした。

本論文は、第1部～第4部によって構成される。

第1部（序論）では、この研究の目的、対象、時代及びデータについて説明し、研究の方法論的な背景や論文構成などについて概述する。

第2部（総論）では、第1章において、近代中国語敬語の記述のための理論的な枠組みを構築する。世界の様々な現象に関して、異なる文化においてそれぞれの認知フィルターを介してカテゴリー化が実現するのであるが、ここでは、古代ギリシャに起源を持つ西洋文化における世界カテゴリーと、オーストラリア原住民のジルバル文化における世界カテゴリーの二つを事例として検討する。これらとの比較を通して、中国文化における伝統的な関係第一次性の陰陽カテゴリーのモデルを提示し、この〈陰陽モデル〉に基づいて認知された世界像の中での人間関係の捉え方を分析する。そして、中国文化における陰陽に基づく世界観、礼に基づく倫理観と言語の対人関係機能を担う敬辞との間の相関関係を明らかにする。第2章では、メタファー型敬語の記号化過程、意味ネットワーク、類似性、文脈条件などの諸問題について議論を展開する。意味ネットワークの問題に関しては、従来、個別の現象としてしか捉えられなかった敬辞にかかわる諸概念の「令、雅、貴、尊、高、大、賢、清、明、龍、鳳、玉、金、光、…／劣、拙、賤、下、小、愚、貧、寒、犬、蝸、…」などを、〈陰陽モデル〉に基づいて一貫性をもって組織化した。類似性の問題に関しては、従来の「客観的類似説」とLakoffによる「創造的類似説」を検証し、近代中国語敬語のメタファーは両説いずれにおいても説明できない第三のメタファーであることを示した。そして、両説を統合し、メタファーの「類似依存型」と「類似創造型」という新しい分類を提唱した。さらに、「類似依存型」を「客観的類似に依存するもの」と「創造的類似に依存するもの」との二種類に下位分類し、敬辞メタファーはこの後者に属するものであることを説いた。第3章においては、「性状、事物、人間関係、心身作用」の四つの範疇で敬辞をグループ分けし、その具体用例（語例、例文）を掲げた。

第3部（各論）は、敬辞使用の実態に関する実証的研究である。第1章では敬辞の言語的文脈を考察する。親族名称を中心に、敬辞とその被修飾成分との間に存在する複雑な共起関係を分析することにより、意味領域における各敬辞間の役割分担や敬意に基づく敬辞間の価値序列がそこに存在していることが判明した。第2章では敬辞の社会的文脈を検証する。年齢の聞き方という一つの事例に焦点をあて、敬辞の使用と人間関係の条件とのかかわりかた、敬辞と間接表現の使い分けなどを考察することにより、話し手と聞き手との身分関係の要素が敬辞の使用に、性別の要素が間接表現の運用に直接影響を与えていることが明らかになった。

第4部では、中国語、日本語、英語の敬語現象を比較することによって、敬語表現の類型分析を行った。そして、この三つの敬語類型を、14の言語と9つのクレオールにおける敬語現象に適用し、敬語の類型的分類とその普遍的モデルの可能性を探った。そこでは、ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語との間に類型的な差異が認められること、ただし、インド・ヨーロッパ語族に属するヒンディー語とペルシャ語は敬語に関してはアジア諸言語に近いこと、また、すべてのクレオールがその祖語であるヨーロッパ言語と同じタイプの敬語を持つこと、などの興味深い事実が判明した。

最後に、「おわりに」として、本論文で扱い得なかった関連性のある問題や将来への発展の可能性について展望した。本論文の意義については、次の4点にまとめることができる。

1 これまで世界の敬語、ボライトネス研究の中で記述されたことのないメタファー型敬語を発見し、その性質を明ら

かにしたこと。

- 2 これまでのメタファー研究、とりわけ近年のLakoffによる認知意味論のメタファーモデル研究に、人間関係のメタファー的認知手段という新たな事例を提供したこと。
- 3 中、日、英語の比較を通して、世界の敬語の類型論的対照研究の新しい可能性が開けたこと。
- 4 〈陰陽〉という中国文化における世界観、価値構造が近代中国語敬語体系の形成に与えた影響を明らかにすることにより、言語と文化との関係が、より明示的、具体的に展示されたこと。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語、英語との対照を視野に入れた近代中国語敬語に関する体系的な記述研究である。この研究は、近代中国語敬語の解明に大きく貢献すると同時に、敬語の対照研究や類型論的研究においても注目すべき成果を上げている。

本論文に対する評価については、次の三つの点からまとめることができる。

- (1) 新しい視角
- (2) しっかりした理論的土台
- (3) データに対するきめ細かな分析

(1) に関しては、まず、認知言語学の方法を導入し、対人関係の認知モデルを使って敬語体系を再構築したところに、これまでの議論にはない理論的斬新さが見られる。そして、近代中国語の敬語現象を、世界現象のカテゴリー化、概念体系の構造と結び付け、認識論のレベルまで掘り下げたことに斬新さと同時に深さを感じられる。さらに、敬語体系の中枢となる基本構造の部分に、心的世界像における二項対立の〈陰陽〉構造を導入したこと、すなわち言語研究の領域において中国伝統の世界観、価値観、倫理観を新しく生かしたことが本論文の特長の一つと言える。敬語は、言語の文法や音韻などの側面に比べて、より社会的、文化的要素に依存することはよく指摘されることであるが、筆者は文化的要素を単なる背景的、二次的要素として見るのではなく、敬語体系の組織化に欠かせない中心的要素として位置づけている。このような言語構造と文化的世界観、価値観の構造を一つの統合システムとして明確に関係付けたことは、敬語研究における一つの新しい試みとして高く評価すべきであろう。

(2) に関しては、まず、これまでの敬語理論に対する的確な把握が上げられる。筆者は、日本語の敬語に関して、山田孝雄、時枝誠記、湯澤幸吉郎、辻村敏樹、宮地裕などの、代表的な敬語論を振り返り、それらの敬語理論によって記述された現象を、人間関係を記号化する狭義的な敬語とみなし、それをダイクシス型敬語と名付け、英語の敬語に関してBrownとLevinsonの〈メンツ〉理論とLeechの丁寧さの原理の研究などによって記述されたポライトネス現象を人間関係を発話行為のレベルで調節するものとし、それをストラテジー型敬語と名付けた。そして、日本語と英語の敬語のそれぞれの性格及びそれらに関連する敬語理論を見据えた上で、近代中国語の敬辞と呼ばれる現象のメタファーの性質を突き止めた。筆者は、敬辞には一次的な字面の意味が存在し、対人関係の丁寧さの含意は、これらの一次的な概念的意味を介して二次的に伝えられたものだとして主張し、このような性質の近代中国語の敬辞を、ダイクシス型、ストラテジー型と並べて、メタファー型敬語と名付けた。そして、自他の人間関係概念と敬辞の字面上の二項対立概念との間のメタファー的対応関係を明らかにすることにより近代中国語敬語の成立プロセスを理論的に説明することに成功した。

次に、体系構築の理論的準備の周到さが上げられる。本論文では中国語敬辞の性質を正確に捉えた上で、近年の認知言語学の成果、とりわけLakoffなどによって提唱されたメタファーの認知モデルを導入している。しかしながら、既存の理論にこだわらず、その限界、メタファーだけでは説明しきれない現象を見極めつつ、中国伝統の認識論からヒントを得て、独自の敬辞統合モデルを作り上げている。

すなわち、第2部第1章「陰陽世界観に基づく対人関係の認知システム」によれば、中国では、伝統的に世界は一つの統一した価値世界として捉えられ、「陰／陽」という統一した価値項に基づいて、様々な二項対立の関係構造が成り立つ

ている。「此／彼、内／外、自／他、從／主、下／上、小／大、暗／明、冷／熱、濁／清、卑／尊、賤／貴、劣／優、愚／賢、貧／富、弱／強、若／老、…」などである。対になるすべての関係軸は、一方が消極的な価値〈陰〉で、もう一方が積極的な価値〈陽〉に属するものとして組織化される。そしてこのように構成された関係ネットワークによって、森羅万象の世界現象が統合的に解釈される。人々の生活経験に基づき、関係枠組みにおける二項概念のどちらかに関連づけられる事物概念が、陰か陽のどちらかの価値を有するものとして価値づけられ、カテゴリー化される。例えば、下／上関係に基づき地は陰、天は陽であり、冷／熱関係に基づき冬は陰、夏は陽であり、暗／明関係に基づき夜、闇は陰、昼、光は陽であり、從／主関係に基づき社会的下位者は陰、社会的上位者は陽であり、若／老関係に基づき子供など年少者は陰、親など年長者は陽であり、弱／強関係に基づき犬、豚などの家畜小動物は陰で、龍、麒麟、鳳凰などの神通のパワーを有するとされる想像上の動物は陽である。

このように、〈陰陽〉という最高次元の価値関係概念によって、世界の様々な性状概念や事物概念が組織化され、カテゴリー化される。このカテゴリー化の過程を通して中国文化における心的世界像のモデルが構成される。この心的世界像の中で、陰又は陽のカテゴリーに属する関係概念や事物概念同士の間、等価と類似関係が成立する。この類似性に基づいて、同カテゴリーの概念同士にメタファーの基盤ができていく。

そして、陰陽関係に基づき、自は陰で、他は陽である。中国語の敬辞における自他の人間関係、つまり話し手の自己と聞き手、第三者を含めた他者との関係もこの陰陽世界モデルに統合される。自己という概念と陰に属する他の概念との間に、そして、他者という概念と陽に属する他の概念との間に等価と類似関係が成立する。伝統的中国社会において礼儀正しく振る舞うことは、このような世界の陰陽秩序を守って行動し、表現することを意味する。敬辞使用のコンテキスト条件が整えば、それぞれ自己のことに關しては陰の概念を通して、他者のことに關しては陽の概念を通して表現することが礼儀的である。したがって、伝統的な中国語の敬辞とは、このような価値的世界の秩序観に基づき、現実世界における高さ、大きさ、熱さなどの客観的な真実情報を越えて、自己のことに關して「劣～、拙～、賤～、下～、小～、愚～、貧～、寒～、犬～、蝸～、…」などの陰の概念を通し、他者のことに關して「令～、雅～、貴～、尊～、高～、大～、賢～、清～、明～、龍～、鳳～、玉～、金～、光～、…」などの陽の概念を通して、メタファー的に表現することである。

このような分析によって、これまでバラバラな個別現象としてしか見られなかった近代中国語の敬辞が一つの体系として総合的に把握することができたのである。このように新しい言語理論と伝統的な認識論をうまく結合することに成功したのは、筆者がしっかりした理論的土台を備えていたからこそであろう。

(3) に関して、本論文は、体系論だけではなく、敬辞の運用的側面についても念入りの調査と分析を行っている。たとえば、第3部第2章において筆者は、社会言語学の立場から、近代小説『金瓶梅詞話』を対象に「年齢質問」という特定の発話行為の運用の実態を調査している。同作品の中からすべての同発話行為の例文をリストアップし、表現スタイルによって、それぞれの発話を8つのタイプに分類し、一つ一つの発話が使われた社会的文脈条件（身分、性別、年齢）を検討している。そして、表現スタイルと社会的要素との相互関係に関する運用上の規則を明らかにしている。ここでは表現スタイルと発話参加者の社会的属性との相関性が具体的なデータを通して実証されている。

ただし、この論文にももちろん欠点と限界があり、新しい発見をしたと同時に、いくつかの疑問点も残している。たとえば、第4部「敬語類型論的対照研究」において、筆者は、近代中国語にもダイクシス型やストラテジー型の敬語が存在していたと述べているが、その実態についての議論はほとんどなされていない。また、世界の敬語類型の分類に際して、23の言語を対象に分類が試みられているが、現実問題として23のすべての言語において同レベルでの記述研究が行われているわけではないので、それぞれの類型を抽出するには、これはまだまだ不十分なデータであると言わざるを得ない。筆者自身も認めるように、残された問題はこれからの課題として引き続き解明していかなければならないものである。

以上の問題点が残されているとは言え、本論文は、総じて論旨、構成、独創性などの点においてきわめて優秀なものである。博士（文学）学位申請論文として十分な価値を有するものと認定する。